



ミャンマー一往日記

2017/05 ~ 2018/02



孤独のミャンマーグルメ (本文参照)



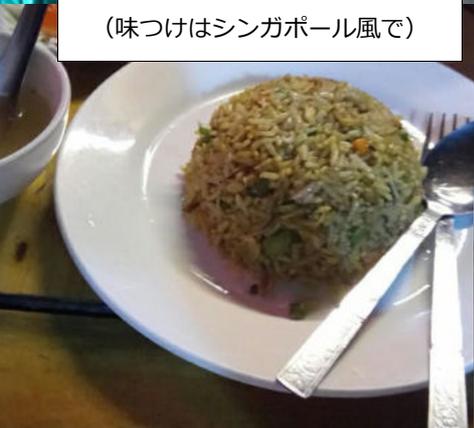
平日の常食、Shweの200円炒飯
(味つけはシンガポール風で)



カメラから目を背けない
屋台オヤジ



朝食はコレ!の
70円屋台炒飯



休日の夕食、Kizunaの
チキンカツ定食400円



ほのかにオタ臭い
カップ麺40円



Homeの250円リゾート。
野菜を摂りたいときの平日夕食。



近所の裏通りの飯屋(読めない)の
野菜たっぷり150円の高コスパ炒飯



目次

この本について	2	ファースト・イメージ	18
		シェタゴン・パヤ	19
		スーレー・パヤ	19
基礎編			
日本から見たミャンマーという国	4		
ミャンマーという国の歴史（アウトライン）	4	生活	
文字	5	抱き枕	22
通貨	6	ネット環境	23
気候	7	トイレ	24
度量衡	7	停電	25
日本との移動手段	8	眼鏡を作る	26
		治安	27
		野良…？	29
お仕事		床屋	29
ミャンマーに滞在した経緯	10	フィットネスクラブ	30
時差と勤務時間と残業	11	仕立て屋	31
誕生祝いと義理返し	12	机と椅子を買う	31
オフィスの食事システム	13		
ビザの更新	14	娯楽	
		著作権無法地帯	34
地理		映像ソフトのフォーマット	35
ヤンゴン (Yangon)	16	モニタ購入	36
レーダン (Hledan)	16	映画館	36
ダウンタウン	16	足マッサージ	37
ハウス・オブ・メモリーズ	17		
ボージョーアウンサンマーケット	18		

食生活

基本パターン	39
イチャコイ	41
70円チャーハン	42
カップラーメン	43
飲み物	44
食中毒	44

交通機関

タクシー	49
鉄道	50
バス	51
バイク・バイタク	52
徒歩	52

あれこれ

犯罪被害	54
貧富の差	55
ケン農家の転作	57
日本への出稼ぎ	57
政治	58
未来のある国	59

この本について

本書は2017年5月から2018年2月までの任期で、仕事でミャンマーに赴任していた筆者が、その10か月の滞在で見聞きしたことや思ったことなどをつれづれなるままに記したものです。海外旅行は大好きなもののマジック・ザ・ギャザリングもないし長期赴任の話がなければ自分もほとんど関心を持っていなかったこの国について、あまり皆様の知らなかったことなどをお伝え出来れば幸いです。

基礎篇



距離的にはタイとほとんど変わりません。就航便の数は段違いですが。

通貨

ミャンマーの通貨はミャンマーチャット (MMK ; Kyat ; Ks) です。

筆者が赴任を開始した 2017 年 5 月頃は 1 円 = 12.5MMK だったのですが、円安が地味に進行していて赴任を終える 2018 年の頭には 1 円 = 11.5MMK くらいになりました。

当然ながら現地での日々のすべての支出は MMK で行っているのですが、買い物をする際には MMK で表示される値札が日本円ではいくらになるかを認識する必要があるわけですが、

これは基本的に面倒なので、感覚的には**ゼロをひとつ取る**だけで済ませています。

1000MMK=100 円と考えるわけですね。

実際には 1000MMK=87 円くらいなわけですが、これを 100 円のつもりで買い物していれば、想定よりも実際の支払いが少ないぶんには何も問題はないというわけです。

本書での記述も、分かりやすさを重視するものとして、現地での価格表記はこの「ゼロをひとつとった日本円」として表記するものとします。10 倍すれば現地通貨の表記。

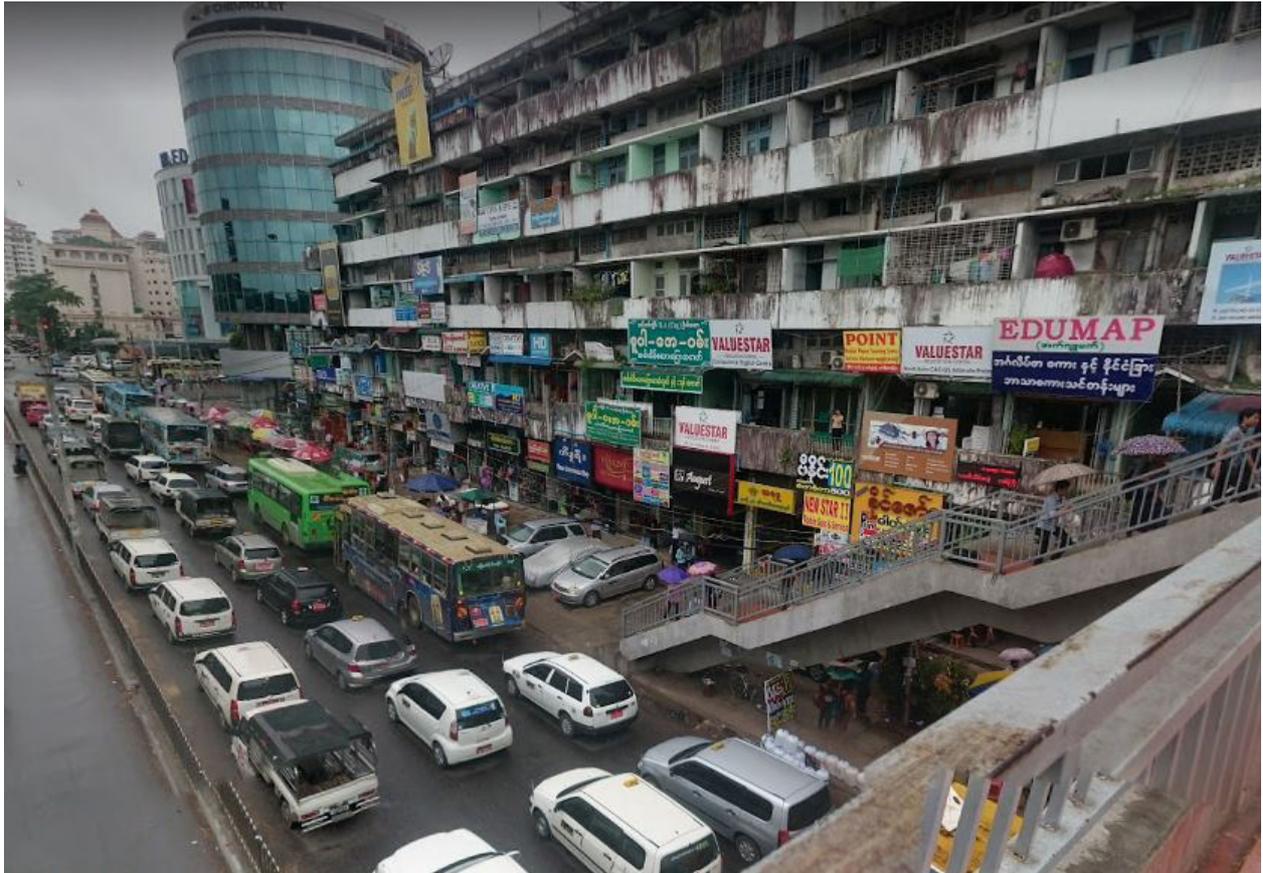
なお現在のミャンマーでは「硬貨」は使用されずに「紙幣」のみが流通しており、さらにその最小単位は 50MMK なので、ゼロをひとつ取って表現できないものはありません。

なお現地通貨の獲得方法としては、海外旅行では定番の「ATM クレカキャッシング」という手が今回は使えなかった（日本のカード会社に電話できないため前倒しの返済ができない）ので、日本から日本円の現金を 10 万円ほど持参して、必要に応じて都度両替所で MMK に両替するというのをやりました。赴任の直後に部屋の調度品を揃えたのを別にすれば、自分の生活パターンではだいたい月に 3 万円もあれば十二分に足りたし 2 カ月に一度は帰国して手元の日本円を補充したので、それで不自由はありませんでした。

なおこれは観光ガイドにも書いてありますが、ミャンマーの空港では**日本円の両替ができない**ので注意が必要です。訪問前に 100US ドルくらいは用意しておきましょう。

ただし、さすがに市中の両替所で 1 万円札の交換ができないことはありませんでした。

お仕事



筆者の勤務していたオフィス周辺（2016年の画像）

時差と勤務時間と残業

ミャンマーの時間帯はUTC+6:30。つまり UTC が **30 分単位でずれている** 珍しい国（というよりミャンマー以外に例を知りません）です。

日本は UTC+9 です、日本のほうが 2 時間半早いことになります。

筆者のミャンマーオフィスの標準勤務時間は 8:00~17:00 でしたので、これは日本時間でいうと 10:30~19:30 ということになります。当時の筆者の仕事は日本で受注した IT システム案件をミャンマーのエンジニアに作らせるというのがメインでしたので、時に Skype で日本と話す必要などもあり、日本との時差は常に考慮しておく必要がありました。

とはいうものの実のところミャンマーのエンジニアは**基本的に定時**で帰るわけですが日本はそれほど忙しくなくても何となく 19 時半頃まで残業している人は割と普通なので、双方の退社時間がそこそこ一致してこの点はさほど問題になりませんでした（笑）。

ミーティングも早朝に日本の始業に合わせて行うようなこともなく、日本時間昼過ぎからセッティングすることが普通でしたので、これも問題にはなりませんでした。

また日本の IT 業界の慣習として「納期直前は連日の残業、場合によっては徹夜」というのもそれほど珍しくありませんが、これを強いるのはミャンマーでは**無理**だということも実感できました（案件が火を吹いたときに大変な苦勞をしてやむなくお願いしたことがあったのですが）。遅くともせいぜい 20 時くらいまでが残業をさせる限界と思えます。まあこれは現地ならではの「遅くなるとバスがなくなりタクシー代を支給する必要が出てしまう」「エンジニアの**半分は女性**なので治安上も深夜に帰宅させるのは控えさせるべき」「連日で帰宅が遅くなると家族が心配して**オフィスに迎えに来る**」「単純に**会社を辞める**人が増える」など様々でしたが、何にせよ日本では珍しくない「連日の深夜残業」をミャンマー人に受け入れさせられる感覚はゼロでした。休日出勤についても同様で、お願いしての土曜出勤はそこそこ可能でしたが日曜日の出勤は「**絶対無理**」というのが率直な感覚です。

もっともこれに関しては実のところ「当然のように残業や休日出勤をする」日本のほうが異常だなと思わざるを得なかったのです。特にミャンマー人が全員帰った後の 19 時頃の

地理



ヤンゴン市。自分の生活区域は北西のレーダン区で、ダウンタウンは南にあります

ヤンゴン (Yangon)

本書は「ミャンマー赴任日記」と銘打ちましたが、実のところミャンマーの旧首都である都市の「ヤンゴン」から筆者は10カ月の間、**一歩も出ておりません**。

もっともローカルの寺院や洞窟巡りとかの趣味を持っていたり、あるいは首都のネーピッドに興味でもない限り、ヤンゴン市から出る理由は何もないのですが（いろいろと危険なところもあるようです）。

とはいえ「ヤンゴン赴任日記」ではさすがに分かりにく過ぎるので、このままにします。

なお「ヤンゴン」は昔は「ラングーン」と呼ばれており、その名前で呼ばれていた頃は色々物騒な事件もありました。興味のある方は調べてみてください。

レーダン (Hledan)

筆者の滞在したホテルとオフィスがあるのは、ヤンゴンの西部にあるレーダン地区でした。近くにヤンゴン大学がある関係で若い方が多く、日本語学校も多く、現地からの日本への窓口としての環境は充実している町でもあります。

また若い方が多いだけに、服屋や美容院や写真スタジオなども多く、一説には筆者が毎日通勤で通っている商店街は「ミャンマーの**竹下通り**」と言われているとか（笑）。

とりあえず普段の生活としては、ミャンマーで普通に買えるものなら買えるという意味で、それほど不自由を感じない場所ではあります。

ダウタウン

日々のことはだいたいレーダン地区や近くの大型ショッピングモールで賄えるのですが、

生活



筆者が居住したマンションの12階エレベーター。3台のうち手前の1台は完全に損壊。

残る2台も常に1台だけは動いているような状態。

「時計じかけのオレンジ」のアレックスの居住マンションを思い出します。

つまりショッピングモールを含めたそのへんのどこにでもあるビルには必ず入り口に金属探知ゲートがあり、これをくぐらないと中に入れません。観光客であろうとも。もっともただのスーパーに出入りする地元民や観光客を金属探知機で調べてどーするねん、という現場の気持ちはあるらしく、実際には買い物に入る自分（リュックサックとシャツとサンダル）が金属探知機に引っかかっても、別に荷物を開けることも要求されず**そのまま通してくれた**ものなのですが（笑）。

まあ、ビルの入り口に金属探知機を置くのはきっとミャンマーの規則なのでしょう。

またエレベーターのある共用部から自分達の専有部まで行くには2つのドアの3つの鍵を開けねばならない構造でした。一番外側は、隣の他人の部屋との共用なのでこれは施錠はしませんでした。専有部のドアとその外のドアは原則として常に施錠したものです。

なお隣の部屋は若い女性が数名住んでいました。まあ時折廊下では出会って会釈したものの、お近づきになれる機会はいっさいありませんでしたけど（笑）。



赴任時には3つの鍵束が渡されました。左が、上の3つの錠を開けて自室に入るためのもの、中央がオフィスのドアの錠を開けて入るための鍵3つ、右はここを若い社員2名と一緒にシェアしたので、

自分の部屋を含めた3部屋のそれぞれの個室の鍵でした（自分は一応3名の中では管理職ポジションでもあったので）。まあ自分は個室に施錠することはまったくなかったので、右の鍵束はまったく使用せず…というか自室の筆筒に入れっぱなしだったのですが。また中央の鍵束も3人の共用スペースに置き「一番最初に出社するヤツが持っていく」という

娯楽



ヤンゴン市内の遊園地。

ガキと、これからセックスをする予定の若いカップルでいっぱいの空間。

なぜ俺はこんなところに来てしまったのだろう。

著作権無法地帯

現在のミャンマーではいわゆる知的財産を保護する法律はありません。正確には著作権法のみ英国統治時代のものが存在しますが、機能しているとは言えない状態です。

これを何とかしようという取り組みはありますが、現時点ではうまくいっていません。

つまり基本は野放しであり、この直接の結果として、ミャンマーでは映画やアニメやPCソフトの**コピー DVD を製造・販売する店**がどこでも堂々と営業しています。

ダウンタウンの露店は勿論、大型ショッピングモールには普通に DVD を売るショップが店を構えており、そこには映画やアニメのコピー DVD が大量に並んでいます。

製品を見る限り少なくとも4つのメーカーがコピー品の製造を手掛けているようであり、複数の店で同一のメーカーのコピー品が並んでおり、つまり普通に流通が成立しています。

コピー DVD を扱う専門店の存在もネットでも知ることができ、潰れる店もあるものの、数年前からネットに載っている店が普通に存続しています（「東京」や「MemoryDVD」などが有名）。まあ取り締まりも何もないので、当然ではあるのですが。

気になるお値段は DVD1 枚あたり 100 円～130 円で、さすがに著作者への還元もクソもないお値段（事実ないのですが）であるとはしか言えず、これでは正規品のビジネスもまずミャンマーでは成立できないと言えます。

筆者はこうした流れに義憤を抱いて毅然として利用を拒否し…たわけでは全然なく（笑）、ミャンマーに居る間は普通に利用しておりました。まあミャンマーでは犯罪ではないし、良い作品ならば日本に帰ってから改めて買うことになるだろうというのもあります。

作品の多くは中国語や英語の字幕がついており、まれにミャンマー語の字幕もつきます。従って日本語音声のアニメなど以外は、あまり食指が動くものではありません。英語の字幕でもあれば十分なアクション映画などは別ですが。

食生活



お気に入りの70円チャーハンの屋台のおっちゃん

飲み物

生水厳禁のミャンマーなので歯磨き以外で水道の水を口にするようなことは絶対に行わずに（まあ日本でも最近では減多にやりませんが）、水分の補給はどこかスーパーやコンビニでも売っているペットボトルやら缶の飲料で済ませました。たまに気分を変えて日本で見たこともない飲料チャレンジもやりましたが、基本自分の定番は**1本30円**のアクエリアスの250ml缶でした。基本的には毎日コンビニやスーパーに寄って数本ずつ補充しつつ、1日に何本も飲んでおりました。オフィスでは冷蔵庫にコカ・コーラの缶が入っていて冷えたのを取れましたがこれは1本50円を支払うシステムでもあったので、通常はアクエリアスを常備。



あとは自室の冷蔵庫にはコーラの1.5ℓのペットボトル（100円）を常備しつつ、さらにしばしば乳飲料が欲しくなることも多かったので、スーパーでイチゴ牛乳の1ℓパック（200円くらい。そんなに安くないと思う）を買って常備していました。冷蔵庫は3人の共用だったのですが、ほどなく3人で一段ずつ使うシステムが自然に定着しました。

食中毒

ミャンマーは生水厳禁の国であって、多少の下痢くらいは書くまでもなく普通にあることであり「ミャンマーでの通過儀礼」と言われるくらいのもので、自分は屋台の飯なども割と好物ではあったのでいつ罹患しても不思議ではなかったものの、一度だけ病名がつくレベルの「食中毒」にやられたことがあったので、そのときの日記を記録しておくことにしましょう。まあ、医者には行かずに済ませたのですが。

交通機関



ミャンマーの松坂から鳥羽への電車

鉄道

基本的に週末はヒマであったことから、自宅のあるレーダン区からダウンタウンに遊びに行くというのもパターンでした。最初の週末はガイドブックで探したスポットに行くようにして行き帰りにタクシーを使ったわけですが、200円で1食を済ませる生活をすると

「片道300~400円」のタクシーは**とても高い**という感覚を普通に抱くようになったので他の手段を検討して「鉄道」というプランを試すことにしました。

ヤンゴン市内はいわゆる「環状線」が通っており2時間くらいで市内を1周するのですが、調べるとダウンタウンにも駅がありレーダンにも駅があります。これだな。さっそく次の週末の5/13に試してみました。グーグルマップで見ると、レーダン駅はホテルから徒歩10分ほどのようだったので、マップを見ながら大通りを西に行くと、ほどなく発見。

ちなみに駅への道は2017年春の時点では泥道だったのですが、ちょうどこの後で舗装されました。日々、改善されてるヤンゴンの市内。

駅舎に入り、窓口で目的地である「ヤンゴンセントラル」を伝えて値段を聞くと20円。**やすい!**さすが庶民の足とはいえ実質タダみたいな値段。喜んで切符を購入してホームへ（通せんぼする形での改札はありません）。

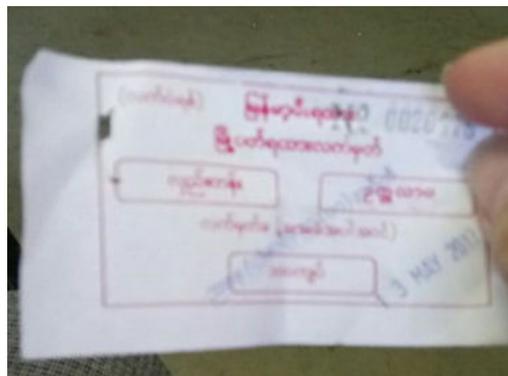
よく見ると壁には時刻表が貼ってあったものの、

それがどの程度正確かどうかはともかく、ミャンマー数字のため読めません（P.5）ので基本的にはただ待つしかありません。最長でホームで30分くらい待つと電車が来たので、たぶん30分に1本くらいの間隔なのだと思います。

そしてミャンマーには**JRの中古車両**が払い下げられているのでホームに入ってくる車両を眺めるのもまた楽しげです（表紙やP.48を参照）。

そしてホームから「よっこらしょ」とよじ登って乗車。バリアフリーなどありません。

走行中に車両ドアが閉まらないのにも日本では考えられない驚きでした。そしてドアのボタンに日本語の掲示。キハ48 5806。これが僕が最初に乗った車両の前世。



あれこれ



どこのスーパーでも見かけられた僕が大好きな光景（本文参照）

ケシ農家の転作

スーパーで普通に買える「そば焼酎」に「麻薬撲滅」を謳ったものがありました。

つまりそれまでケシを栽培していた農家に対してソバへの転作を促して造らせたソバによって作った焼酎というわけですね。

麻薬撲滅への支援といった高邁な意識というわけでもなく普通の酒類と同じ値段（つまりそこそこ安い）でありやはりそこそこ受けたので日本への土産に買っていきましたが、ミャンマーに残る黒社会の様子がほの見える一品ではありました。

なお全然関係ありませんが、これを日本土産に持ち帰った際に布の手提げ袋に放り込んで空港で預けたら、

多分荷物を乱暴に放り投げたのだと思いますが日本に到着した際に瓶が**粉々に砕けて**いてその袋と一緒に入れた土産が大損害、みたいな事件もありました。これもミャンマーでの空港事情を示す一例かも（いや、エアアジアが残念な仕事をしただけじゃね？）



日本への出稼ぎ

ミャンマーから日本へ出稼ぎに来る方は多く、というより僕もその**人足頭**をやっていたようなものなわけであり（笑）「日本で働くこと」について現地の方と話すことは何度もありました。この会社はミャンマーをソフトウェアの開発拠点としていたものの、仕様は日本のお客様と日本語で決める必要があり、そしてそれも最終的にはコストのかかる僕ら日本人でなくミャンマー人のエンジニアから日本語ができる者を抜擢してリーダーに行うというのがこの会社のビジネスモデルでした（これは悪くない考えだと思います）。このことから現地では開発を行うエンジニアとは日本語を中心に対話し、日本語の勉強の